

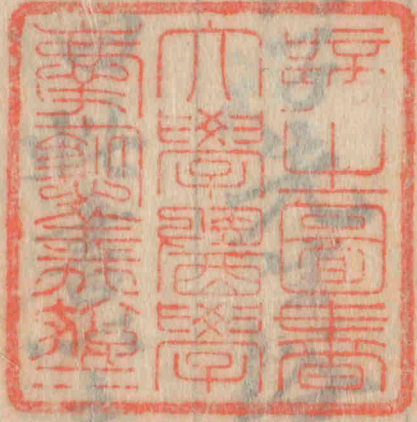
仁犬咬傷治方



k 210-1

138 892
1-17

江都連山呂先生嘗權枉大咳
傷於方一扁遂行時方人祇喜惠
家乃
初余
欲重梓此記子孟序諸公素校楷
齊人亦有求皆辭拒不應然竊喜



鈐木後氏

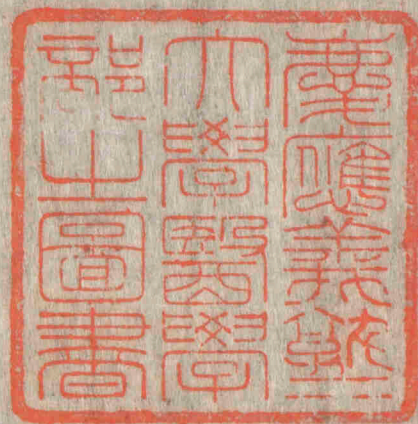
493.877

Ky-1

No. 2859

12 K

210-1



重慶大學

2907

江都連心呂先生嘗擢狂犬咬
傷治方一篇兼行于東方人被其惠
蒙丙子先生浴有馬溫泉路出大阪
謂余曰此書以未行西方也鈴木俊民
欲重梓此地子蓋序諸余素拙楷
辭今有求皆堅拒不應然竊喜

此書傳海內也乃屬和文一章以塞
其責先生又書曰江都令改為漢文
不可辭乃取前文自譯曰蓋聞上世
大之也三神相與經營國家又
設醫藥以除蒼生及禽獸之疾
其來也遠矣近世風犬之禍不

去治方者坐俟其斃雖苟知之藥
材之不可得則亦已矣於是乎輯單
方若干加以治風犬之術以祀三神之
續也嗟矣汗牛充棟唯災于木者
世或有焉以書僅一小冊乃能起死
回生其為賜也夥矣長木之斃無不

標國狗之瘕無不瘥世人宜宗莊
一本以應卒云寅曆丙子季夏大
阪五井純禎書

それ狂犬^{キヤウケン}乃人^ニと咬^{カウ}と吾邦^{ミヅノクニ}古来^{コライ}いふに

さうも近年^{キンネン}突如^{トツジツ}よりけ病^{ケビ}つゝて西國^{セイコク}

けしるに中國^{チュウゴク}上方^{ジョウホウ}へ移^{ウツリ}るをさるる来^キふに何^{ナニ}

け犬^{イヌ}小^コそれさる人^{ヒト}傷^{キズ}おもさういふるは

も何^{ナニ}も又^{マタ}きざあさといけのまといふるをや

いゆふもさういふ人^{ヒト}輕^{カサ}くともいふひく治療^{リョウリョウ}に

及^{およ}ぶをちとておけい目^メとて處^{ところ}て病^びれり十^{じゅう}

八九^{はちゅう}はれをさるやく治療^{リョウリョウ}をくゝて死^しをゆ

多小多あり〜〜〜時ハ冷水ハ瘡をよ〜
〜〜〜血の止ふと待〜〜せざと〜
〜〜れ又瘡大なる流水を〜〜
血少〜〜後〜〜とさず〜〜あ〜〜もれ紙又ハ
〜〜び〜〜〜〜風の人ぬ〜〜
大〜〜

一地榆根ツルギとほ〜瘡ふほけ又汁を飲〜生
〜〜ものお〜〜ハ乾糸を粉〜〜ほけ又

さゆ〜一日に三度〜百日〜百香〜

一頭髮ツルギ蝟皮ツルギ當分焼為末お〜一盞を飲

へ〜或ハ病人目〜〜口嚙はくむものハ歯を折て

灌そけハ〜〜くお〜

一蓖麻子ヒシ五十粒ヒシ殻をさ〜と〜す〜炒め〜

瘡を〜〜ひ付〜

一梔子シ三焼硫黄二味當分粉〜〜瘡

〜付〜

こづめ

志之

なま

なます

福

又金

一之云

生々々々々

のち

天

臺

三

1

そけりや

一

口^りの^ミ

、 腦

かきつておろし

一馬錢子（まけんし）一文為末水にて服し

一咬所へ人糞（にんぽう）或ハ犬糞（けんぽう）或ハ牛糞（ぎゅうぽう）をいれ

附

一咬きてほえろしきびく（きびく）散中治

に用て極

雄黄 五文 麝香 一文 二味研き之を酒

二文用ゆふ病人服しとさるる鼻

清きとそを灌ぐし薬をいれ

移しめおろしきびく

内へし大便より悪物をとり

呼吸し前の薬とすびち

一傷（きず）とすびふ人狂言風丸の

此ハ虎牙或ハ虎骨を割（く）飲し

一毒氣散し狗乃鳴く

て煩悩断絶し百方不治の

お斗水も個何へて

一斑猫の入葉も毒を小便より下り方供書
小裁て其切何れと成偏より純道も班猫
乃毒大小人も害何れ且其の斑猫を討求
くくあよ今も載くも又右乃供方を
用てゆめれくくくくくく考用し
其方本葉も何なり

くくあよ

一病人頭頂上よりあき髪てくくくく

ちやくわくくくく

一風とさけ静なるあよ居てお供す

一厚味ある物 ちやくくくく 小豆

ちやくくく

生菜 酸くくく 百りけゆび

一多 獣 魚 油膩 酒 去年のゆび

くくく

くくく

くくく

一狗肉 齧蝨 落葵 一生つむ

みそれをくくくくくくくくく

るをくくくくくくくくく

右諸方法、病源候論、肘後方、千金方、外臺
秘要、文仲方、備急方、小品方、崔氏方、必効方
古今錄驗方、神珍方、簡便方、救急方、經驗方
及元明之諸方書所載也。然まづも或ハ精
或ハ略シテ甚異同あり。故ルテ諸君
考合テたゞさふハ補ヒちがひ割リ其要
をもちきざりて用ヤと云ハに、
元文元年丙辰初冬日野呂元丈實夫撰

附録

一 狂犬に咬まれく自愈ちやうて後大熱發おほつ一瘡かさもむきありこれハ
毒氣どくき内と攻うちしむ是こゝるふ時ハ鉄漿てつじやう一盃飲のむへ一忽たちまち熱解け
瘡かさ再び發はし膿うみけ出でて毒氣どくき發はる咬かもころとれくやく鉄
漿じやうと飲のむとす

一 山中又狂狼有て人殺害ころもこれ又狂犬の治方ぢうと異なり
あつどんむあるべからず

一 鼠咬ねずみもころにもやく灸しやうもどく棒皮ぼうひ黄わうけそ洗せんふもく
毒氣どくき少く大熱發おほつるハ黑豆こくろ大山おほ山さん施せ子し草そう各中かくちゆう煎服せんぷく瘡かさ愈よく
後山ごさん料りやうを食くへ又また散さんも一生いしやうもむへ一又方胡枝花こしきの葉はよく
搗う研けん瘡かさの上うへ塗ぬる妙めうく同敷どうしきする也なり又茲こゝに記しす

此書ハ元文丙辰年東都醫官野呂元丈先生著述
 せり其比東國に狂大流行して是を以て咬傷ある者多く
 あり死に此書一ふい出せしう令紙金とる者救をさ
 ど余大坂は儒居とふと十餘年今猶上方狂大絶へ
 ずして死とる者少のべとるもい書京大坂小坂
 大とてやぐん實み海世第一の好書なり年来此書と重
 刊せんとの志ありき幸いある先生有馬入湯れ日旅館
 へ請ふで此書を普く世にあらせんと死れを則許容

しり市中及山家までも此書紙求おきて活方を
 施さば狂大乃難なるべしと希ふものなり

寶曆六年丙子初姪

大坂新鞆町

鈴木俊民士典蔵版

小治堂前

大坂書林 毛利田庄太郎發行

